

千石荘の昆虫（2016-2017 年度調査）

岩崎 拓（貝塚市立自然遊学館）

はじめに

貝塚市の中央部において里山里地の景観が残されている「せんごくの杜」を含む千石荘一帯において、2005年と2006年、および2011年から2015年にかけて定期的な昆虫調査を行ってきた（岩崎、2018b など）。2016年と2017年も継続して調査を行ったので、ここに報告する。両年の簡単な速報は、季刊誌「自然遊学館だより」で報告済みである（岩崎、2017、2018a）。

調査方法

貝塚市名越、橋本、および熊取町七山北にまたがる全長約1.2kmの周回コースを設定し（図1）、2016年と2017年の4月から12月まで、月に1回のペースで、各年合計9回、雨の日を避けて調査を行った。千石荘調査地は、メッシュコード（環境庁、1997）が51354299、標高は約45～65mの間である。

調査ルートは、2015年度から少し変更し、千石荘ロータリー付近から切通しを南西方向に抜け、水田地帯の中を大井谷池の西岸に沿って南下し、ボタン池の土手を経て、雑木林に入り、牛神池の東辺を通過し、スタート地点へ戻るコースを設定した。調査コース中の切通し（図2）、林縁（図3）、および大井谷池の景観を示した（図4）。そのコースを約2時間かけて歩き、主に見取り法を用い、鳴き声で判断できる場合は記録に加えた。

大阪府レッドリストは、2014年に改訂され（大阪府、2014）、本稿では改定後のリストに則って記述を行った。

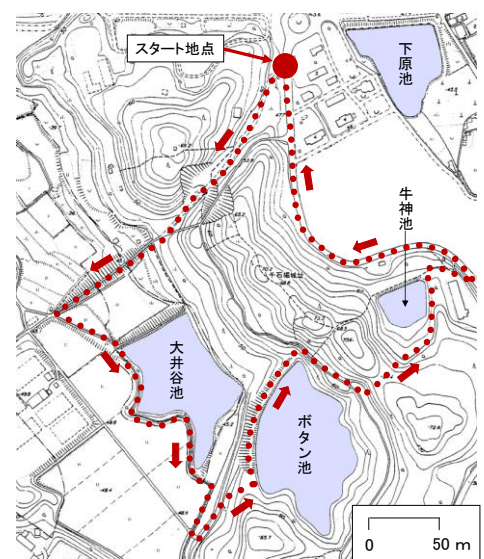


図1. 千石荘における昆虫調査ルート

点線が歩行ルート（全長約1.2km）、矢印が進行方向を示す。



図2. 切通し
(2017年4月13日)



図3. 林縁の景観
(2017年4月13日)



図4. 大井谷池の景観
(2016年7月2日)

結果および考察

2016年と2017年の結果を、主な目ごとに記述した後、注目種についてまとめた。2015年から開始された自然遊学館スタッフと市民調査員との協同調査である「千石荘講座」(4月から12月までの第2金曜日に実施)で得られた結果も併せて、2011年以降の結果との比較を行った。

1. トンボ目

2016年は6科17種、2017年は7科18種のトンボが確認された(表1、2)。大阪府レッドリスト種に関しては、ベニイトトンボを2016年8月に、キイトトンボ(図5)を2016年6月から9月までと2017年7月と8月に、およびウチワヤンマ(図6)を両年の7月と8月に確認した。大阪府レッドリストにおけるランクは3種とも準絶滅危惧である。このうち、キイトトンボだけが毎年確認され、個体群が安定的に保たれているものと考えられる(表7参照)。

以前に記録がある準絶滅危惧の4種、ナツアカネ、アキアカネ、ノシメトンボ、ヨツボシトンボは、両年とも確認されなかった。このうち、ナツアカネが最も確認されていない期間が長く、2005年が最後の記録となっている。ヨツボシトンボに関しては、上記の千石荘講座において、2017年5月12日と6月9日に確認されている。また、千石荘講座では、2016年5月13日に、大阪府レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類のオグマサナエが確認されている(澤田、2016)。やや異色のトンボとしては、幼虫が流水にすむコシボソヤンマが2017年7月に確認されたことがあげられる。



図5. キイトトンボ
(2016年8月2日)



図6. ウチワヤンマ
(2016年7月2日)

表1. 2016年4月から12月にかけて千石荘において確認されたトンボ目

「○」印は成虫による確認であることを示している。

科	種	学名	調査月 調査日	4月 12日	5月 5日	6月 2日	7月 2日	8月 2日	9月 6日	10月 4日	11月 3日	12月 1日
カワトンボ科	ハグロトンボ	<i>Calopteryx atrata</i>						○				
アオイトトンボ科	オオアオイトトンボ	<i>Lestes temporalis</i>							○	○		
イトトンボ科	キイトトンボ	<i>Ceragrion melanurum</i>				○	○	○	○			
	ベニイトトンボ	<i>Ceragrion nipponicum</i>						○				
	アオモンイトトンボ	<i>Ischnura senegalensis</i>			○							
ヤンマ科	クロスジギンヤンマ	<i>Anax nigrofasciatus nigrofasciatus</i>						○				
	ギンヤンマ	<i>Anax parthenope julius</i>			○			○	○			
サナエトンボ科	ウチワヤンマ	<i>Ictinogomphus clavatus</i>				○	○					
トンボ科	ハラビロトンボ	<i>Lyriothemis pachygastra</i>			○							
	シオカラトンボ	<i>Orthetrum albistylum speciosum</i>			○	○	○	○	○	○		
	オオシオカラトンボ	<i>Orthetrum triangulare melania</i>				○	○	○				
	ショウジョウトンボ	<i>Crocothemis servilla mariannae</i>				○						
	リスアカネ	<i>Sympetrum infuscatum</i>						○	○	○		
	タイリクアカネ	<i>Sympetrum striolatum imitoides</i>										○
	チョウトンボ	<i>Rhyothemis fuliginosa</i>					○	○	○			
	コシアキトンボ	<i>Pseudothemis zonata</i>				○	○	○				
	ウスバキトンボ	<i>Rhyothemis fuliginosa</i>					○	○	○	○	○	

表2. 2017年4月から12月にかけて千石荘において確認されたトンボ目

「○」印は成虫による確認であることを示している。

科	種	学名	調査月 調査日	4月 13日	5月 2日	6月 6日	7月 3日	8月 1日	9月 14日	10月 3日	11月 7日	12月 5日
カワトンボ科	ハグロトンボ	<i>Calopteryx atrata</i>						○				
アオイトトンボ科	オオアオイトトンボ	<i>Lestes temporalis</i>							○			
	ホソミオツネイトンボ	<i>Indolestes peregrinus</i>				○						
イトトンボ科	キイトンボ	<i>Ceragrion melanurum</i>					○	○				
	アオモンイトンボ	<i>Ischnura senegalensis</i>						○	○			
	クロイトンボ	<i>Cercion calamorum calamorum</i>						○				
サナエトンボ科	ウチワヤンマ	<i>Ictinogomphus clavatus</i>					○	○				
ヤンマ科	クロスジギンヤンマ	<i>Anax nigrofasciatus nigrofasciatus</i>						○				
	ギンヤンマ	<i>Anax parthenope julius</i>				○	○	○	○			
	コシボソヤンマ	<i>Boyeria maclachlani</i>					○					
エゾトンボ科	オオヤマトンボ	<i>Epophthalmia elegans</i>						○				
トンボ科	シオカラトンボ	<i>Orthetrum albistylum speciosum</i>				○	○	○	○			
	オオシオカラトンボ	<i>Orthetrum triangulare melania</i>						○				
	ショウジョウトンボ	<i>Crocothemis servilia mariannae</i>				○		○				
	リスアカネ	<i>Sympetrum infuscatum</i>						○	○	○		
	チョウトンボ	<i>Rhyothemis fuliginosa</i>				○	○	○				
	コシアキトンボ	<i>Pseudothemis zonata</i>				○	○	○				
	ウスバキトンボ	<i>Rhyothemis fuliginosa</i>			○		○	○	○			

2. バッタ目

2016年は8科32種、2017年は10科32種が確認された(表3、4)。種数、種構成ともほとんど変わらない中、両年の顕著な相違点はオンブバッタ属に関することである。すなわち2016年には

表3. 2016年4月から12月にかけて千石荘において確認されたバッタ目

「△」印は幼虫による確認、「○」印は成虫による確認、「鳴」印は鳴き声による確認であることを示している。

科	種	学名	調査月 調査日	4月 12日	5月 5日	6月 2日	7月 2日	8月 2日	9月 6日	10月 4日	11月 3日	12月 1日
ツユムシ科	セスジツユムシ	<i>Ducetia japonica</i>							○		○	
	ツユムシ	<i>Phaneroptera falcata</i>								○		
キリギリス科	クビキリギリス	<i>Euconocephalus thunbergi</i>				○						
	クサキリ	<i>Ruspolia lineosa</i>					△	△	○	△		
	オナガササキリ	<i>Conocephalus gladius</i>						△	○	○	鳴	鳴
	ホシササキリ	<i>Conocephalus maculatus</i>					○			○	○	
	ウスイロササキリ	<i>Conocephalus chinensis</i>								○		
	キリギリス	<i>Gampsocleis buergeri</i>		△		△	○	○	鳴			
	ヤブキリ	<i>Tettigonia orientalis</i>		△		△○	○					
コオロギ科	ツヅレサセコオロギ	<i>Velarifictorus mikado</i>							鳴	鳴		
	ナツノツヅレサセコオロギ	<i>Velarifictorus grylloides</i>				鳴	鳴					
	モリオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus sylvestris</i>							鳴	鳴		
	ハラオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus campestris</i>							鳴	鳴	鳴	
	エンマコオロギ	<i>Teleogryllus emma</i>							鳴	鳴		
	タンボコオロギ	<i>Velarifictorus parvus</i>					○					
マツムシ科	アオマツムシ	<i>Trujalia hibernis</i>							鳴	鳴		
	カンタン	<i>Oecanthus longicauda</i>									鳴	
ヒバリモドキ科	クサヒバリ	<i>Svistella bifasciatum</i>							鳴	鳴	鳴	
	キンヒバリ	<i>Natula matsurai</i>		鳴		鳴	鳴					
	マダラスズ	<i>Dianemobius nigrofasciatus</i>							鳴	鳴	鳴	
	シバズ	<i>Polionemobius mikado</i>					○					
カネタタキ科	カネタタキ	<i>Ornebius kanetataki</i>							鳴	鳴	鳴	鳴
オンブバッタ科	オンブバッタ	<i>Atractomorpha lata</i>							○	○		
バッタ科	ツチイナゴ	<i>Patanga japonica</i>		○	○	○	○		△○	△○	○	○
	コバネイナゴ	<i>Oxya yezoensis</i>					△	△		○		
	ショウリヨウバッタ	<i>Acrida cinerea antennata</i>					△	△○	○			
	ショウリヨウバッタモドキ	<i>Gonista bicolor</i>						○	○	○	○	
	トノサマバッタ	<i>Locusta migratoria</i>					○	△	○	○		
	クルマバッタモドキ	<i>Oedaleus infernalis</i>						△				
	イボバッタ	<i>Trilophidia japonica</i>							○			
	クルマバッタモドキ	<i>Oedaleus infernalis</i>							△○			
	イボバッタ	<i>Trilophidia japonica</i>								○		

オンブバッタのみ (3♂1♀) が確認され、2017 年には外来種、あるいは国内外来種と考えられるアカハネオンブバッタのみ (2♂2♀) が確認されたことである。アカハネオンブバッタは貝塚市内では 2013 年に海沿いの地域で初めて確認され (岩崎、2014)、千石荘では 2016 年 7 月 8 日の千石荘講座時に初めて確認されたので、内陸部への分布拡大に 3 年を要したことになる。

大阪府レッドリストで準絶滅危惧に指定されているナツノツヅレサセコオロギは、両年とも越冬世代成虫の鳴き声が確認されたが、標本は得られなかった。草原性の種であるショウリョウバッタモドキは、2015 年の調査でまとまった個体群が生息する場所が確認されたが、2016 年、2017 年ともに、個体群が安定して保たれていることが確認された (図 7)。同じく草原性の種であるクルマバッタは、当館に 2008 年の標本があり、2015 年 9 月 11 日の千石荘講座において久々に確認されたが、今回の調査では確認されなかった。



図 7. ショウリョウバッタモドキ
(2016 年 11 月 3 日)

注目種のカンタンは、両年とも確認され、2017 年 8 月に確認されたハネナガヒシバッタは 2013 年以來の記録となった。気がかりな種としては、2006 年が最後の確認となっているササキリモドキがあげられる。

表 4. 2017 年 4 月から 12 月にかけて千石荘において確認されたバッタ目

「△」印は幼虫による確認、「○」印は成虫による確認、「鳴」印は鳴き声による確認であることを示している。

科	種	学名	調査月 調査日	4月 13日	5月 2日	6月 6日	7月 3日	8月 1日	9月 14日	10月 3日	11月 7日	12月 5日
コロギス科	ハネナシコロギス	<i>Nippancistroger testaceus</i>		△								
ツユムシ科	サトクダマキモドキ	<i>Holochlora japonica</i>										○
キリギリス科	クビキリギス	<i>Euconocephalus thunbergi</i>			○							
	クササキ	<i>Ruspolia lineosa</i>					△					
	オナガササキ	<i>Conocephalus gladius</i>				△				○	鳴	
	ホシササキ	<i>Conocephalus maculatus</i>					○					
	ウスイロササキ	<i>Conocephalus chinensis</i>					○	△	○	○		
	ササキ	<i>Conocephalus melas</i>						△	○	○		
	キリギリス	<i>Gampsocleis buergeri</i>		△				鳴	鳴	鳴	鳴	
ヤブキリ	<i>Tettigonia orientalis</i>		△	△	△							
コオロギ科	ナツノツヅレサセコオロギ	<i>Velarifictorus grylloides</i>					鳴					
	モリオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus sylvestris</i>							鳴			
	ハラオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus campestris</i>							鳴	鳴		
	エンマコオロギ	<i>Teleogryllus emma</i>				△	△	○	鳴	鳴	鳴	
マツムシ科	アオマツムシ	<i>Trujalia hibinonis</i>							鳴	鳴	鳴	
	カンタン	<i>Oecanthus longicauda</i>								鳴	鳴	
ヒバリモドキ科	クサヒバリ	<i>Svistella bifasciatum</i>							鳴	鳴	鳴	
	キンヒバリ	<i>Natula matsuurai</i>			鳴	鳴	鳴					
	マダラスズ	<i>Dianemobius nigrofascatus</i>							鳴	鳴	鳴	
	シバズ	<i>Polionemobius mikado</i>					鳴			鳴	鳴	
	ウスグモズ	<i>Usugumona genji</i>								○		
カネタタキ科	カネタタキ	<i>Ornebius kanetataki</i>							鳴	○	鳴	
オンブバッタ科	アカハネオンブバッタ	<i>Atractomorpha psittacina</i>					○		○	○		
ヒシバッタ科	ハラヒシバッタ	<i>Tetrix japonica</i>					○					
	ヒシバッタ属	<i>Tetrix sp.</i>		△								
	ハネナガヒシバッタ	<i>Euparatetix insularis</i>						○				
バッタ科	ツチイナゴ	<i>Patanga japonica</i>		○	○	○	○		△○	△○	○	
	コバネイナゴ	<i>Oxya yezoensis</i>					△	○	○	○	○	
	ショウリョウバッタ	<i>Acrida cinerea antennata</i>						○	○	○		
	ショウリョウバッタモドキ	<i>Gonista bicolor</i>						△		○	○	
	トノサマバッタ	<i>Locusta migratoria</i>				○				○		
	クルマバッタモドキ	<i>Oedaleus infernalis</i>						○	○			
	イボバッタ	<i>Trilophidia japonica</i>						○				

3. カマキリ目・ナナフシ目

カマキリ目に関して、2016年はオオカマキリとハラビロカマキリの2種しか確認されなかったのに対して、2017年はチョウセンカマキリとコカマキリも確認され、草原から林縁にかけて普通に生息する4種が確認されたことになる。ただし、いずれの種も、著者がオオカマキリとチョウセンカマキリを研究していた1990年代の泉州地域の他の生息地から比べると、この2種は明らかに個体数および卵嚢数が減少している。

2013年が最後の確認年になっているという理由から、2016年にナナフシモドキを注目種にしたが、2017年8月1日に成虫を確認することができた(図8)。



図8. ナナフシモドキ
(2017年8月1日)

4. カメムシ目

セミ科は両年とも、ニイニイゼミ、アブラゼミ、クマゼミ、ツクツクボウシの4種を目視と鳴き声で確認したが、2011年以外は毎年確認されていたチッチゼミは、2016年、2017年とも鳴き声を聞くことはなかった。また、2000年代の初めに確認されていたハルゼミの鳴き声も今回の2年の調査では確認されなかった。チッチゼミとハルゼミの鳴き声は、2016年と2017年の千石荘講座においても確認されなかった。両種とも主にアカマツ林に生息する種で、当地におけるアカマツの衰退と関係があるのかもしれない(上久保ほか、2020)。その他、ミンミンゼミが、2016年8月12日の千石荘講座において、鳴き声で確認されている。

クスベニヒラタカスミカメは、2015年に中国大陸から南大阪に侵入した外来種で(安永、2016)、同年11月には貝塚市の臨海部を中心に多数の個体が確認され(白木・岩崎、2017)、千石荘では同年12月の調査で初めて確認された(岩崎、2018b)。今回の2年の調査でも引き続き確認されたが、寄主植物であるクスノキを枯らすほどの被害は与えていない(図9)。



図9. クスベニヒラタカスミカメ
(2017年8月1日)

その他、注目種のオオキンカメムシは今回も確認されず、2005年が最後の確認年になっている。2016年12月に確認されたケヤキヒトスジワタムシは、自然遊学館に標本がなかった種である。

5. アミメカゲロウ目

注目種に関して、アミメクサカゲロウが2017年7月に確認されたが、ラクダムシは2011年が最後の記録になっている。その他、ミドリヒメカゲロウが2016年4月に確認され、この種はこれまで貝塚市内では蕎原の標本(2008年4月9日採集)しか当館になかったものである。

6. コウチュウ目

大阪府レッドリスト種に関しては、準絶滅危惧のジュウサンホシテントウが2017年7月に確認された(図10)。2015年12月8日の海塚での採集以来、貝塚市内で2例目の標本となった。カブトムシとコクワガタは両年とも確認されているのに対して、ヒラタクワガタは両年とも確認されなかった。



図10. ジュウサンホシテントウ
(2017年7月3日)

2016年12月に確認されたニッポンツヤヒラタゴミムシと、2017年11月に確認されたアオヘリアトキリゴミムシは、いずれも自然遊学館に標本がなかった種である。また、2017年6月に確認されたヤツメカミキリは、これまで貝塚市内では木積と蕎原の標本が当館にあったが、千石荘での記録は初めてである。

7. ハエ目

注目種の手モドキハナアブは2013年の調査まで毎年確認されていたが、2014年以降確認されていない。2016年7月と2017年6月に確認されたミスジガガンボは、これまで木積から和泉葛城山山頂にかけて確認されていたが、千石荘での記録は初めてである。

8. チョウ目

チョウ類に関しては、2016年は5科26種(表5)、2017年は5科30種(表6)が確認された。

表5. 2016年4月から12月にかけて千石荘において確認されたチョウ類

「△」印は幼虫による確認、「○」印は成虫による確認であることを示している。

科	種	学名	調査月 調査日	4月 12日	5月 5日	6月 2日	7月 2日	8月 2日	9月 6日	10月 4日	11月 3日	12月 1日
アゲハチョウ科	ナミアゲハ	<i>Papilio xuthus</i>		○		○			○			
	ナガサキアゲハ	<i>Papilio memnon thunbergii</i>			○		○	○	○			
	クロアゲハ	<i>Papilio protenor demetrius</i>					○		○			
	モンキアゲハ	<i>Papilio helenus nicconicolens</i>						○				
	アオスジアゲハ	<i>Graphium sarpedon nipponum</i>			○			○	○		○	
シロチョウ科	キタキチョウ	<i>Eurema mandarina</i>					○	○		○	○	
	モンキチョウ	<i>Colias erate poligraphus</i>			○	○						
	モンシロチョウ	<i>Pieris rapae crucivora</i>		○	○	○	○	○	○	○	○	
タテハチョウ科	ヒメウラナミジャノメ	<i>Ypthima argus</i>			○	○	○		○	○		
	ヒカゲチョウ	<i>Lethe sicelis</i>					○					
	サトキマダラヒカゲ	<i>Neope goschkevitschii</i>			○			○	○			
	コムシジ	<i>Neptis sappho intermedia</i>		○	○	○	○	○				
	キタテハ	<i>Polygonia c-aureum</i>				○					○	
	ヒオドシチョウ	<i>Nymphalis xanthomelas japonica</i>								○		
	ゴマダラチョウ	<i>Hestina japonica</i>						○				
	ツマグロヒョウモン	<i>Argyreus hyperbius hyperbius</i>			○			○	○	○		
	テングチョウ	<i>Libythea celtis celtoides</i>		○	○							
	シジミチョウ科	ウラギンシジミ	<i>Curetis acuta paracuta</i>						○		○	
ヤマトシジミ		<i>Zizeeria maha argia</i>		○				○	○	○		
ウラナミシジミ		<i>Lampides boeticus</i>							○	○	○	
ツバメシジミ		<i>Everes argiades hellotia</i>			○							
セセリチョウ科	ベニシジミ	<i>Lycaena phlaeas daimio</i>		○	○		○			○	○	
	ダイミョウセセリ	<i>Daimio tethys</i>			○	△						
	イチモンジセセリ	<i>Parnara guttata guttata</i>							○			
	チャバネセセリ	<i>Pelopidas mathias oberthueri</i>							○	○		
	コチャバネセセリ	<i>Thoressa varia</i>					○					

表6. 2017年4月から12月にかけて千石荘において確認されたチョウ類

「△」印は幼虫による確認、「○」印は成虫による確認であることを示している。

科	種	学名	調査月 調査日	4月 13日	5月 2日	6月 6日	7月 3日	8月 1日	9月 14日	10月 3日	11月 7日	12月 5日
アゲハチョウ科	ナミアゲハ	<i>Papilio xuthus</i>			○			○				
	キアゲハ	<i>Papilio machaon hippocrates</i>							○			
	ナガサキアゲハ	<i>Papilio memnon thunbergii</i>				○		○				
	クロアゲハ	<i>Papilio protenor demetrius</i>			○			○				
	アオスジアゲハ	<i>Graphium sarpedon nipponum</i>					○	○				
シロチョウ科	キタキチョウ	<i>Eurema mandarina</i>		○		○		○				
	モンキチョウ	<i>Colias erate poliographus</i>		○	○	○	○					○
	モンシロチョウ	<i>Pieris rapae crucivora</i>		○	○	○	○	○	○			○
タテハチョウ科	ヒメウラナミジャノメ	<i>Ypthima argus</i>			○		○	○	○	○		
	ヒメジャノメ	<i>Mycalesis gotama fulginia</i>							○			
	ヒカゲチョウ	<i>Lethe sicelis</i>						○	○	○		
	クロコノマチョウ	<i>Melanitis phedima oitensis</i>					○					△○
	サトキマダラヒカゲ	<i>Neope goschkevitschii</i>			○	○		○	○			
	コムシジ	<i>Neptis sappho intermedia</i>			○			○	○			
	キタテハ	<i>Polygonia c-aureum</i>		○	○							○
	アカタテハ	<i>Vanessa indica</i>			△							
	ヒメアカタテハ	<i>Cynthia cardui</i>				○						
	ツマグロヒョウモン	<i>Argyreus hyperbius hyperbius</i>						○				
	テングチョウ	<i>Libythea celtis celtoides</i>		○	○							○
シジミチョウ科	ウラギンシジミ	<i>Curetis acuta paracuta</i>				○		○		○		
	ムラサキシジミ	<i>Narathura japonica</i>						○				
	ヤマシジミ	<i>Zizeeria maha argia</i>			○	○	○	○	○			
	ウラナミシジミ	<i>Lampides boeticus</i>							○	○		
	ツバメシジミ	<i>Everes argiades hellotia</i>			○	○					○	
	ルリシジミ	<i>Celastrina argiolus ladonides</i>		○								
	ベニシジミ	<i>Lycaena phlaeas daimio</i>		○	○	○	○					○
セセリチョウ科	イチモンジセセリ	<i>Parnara guttata guttata</i>							○			
	チャバネセセリ	<i>Pelopidas mathias oberthueri</i>							○			
	コチャバネセセリ	<i>Thoressa varia</i>			○		○					
	キマダラセセリ	<i>Potanthus flavus flavus</i>							○			

チョウ類の出現種数は、比較可能な2011年以降の種数を比べると、2011年25種、2012年29種、2013年27種、2014年19種、2015年30種と推移してきていて、2014年が少なかった。2014年は、キタテハ、ウラナミシジミ、ツバメシジミ、ベニシジミといった普通種が確認されず、その原因は不明である。気象統計として強いてあげれば、2014年は6月と7月の雨量が少なかった“空梅雨”の年であったが（気象庁、熊取測候所のデータ）、そのことがチョウ類の種数に影響を与えたかどうかは分からない。その他、早春に成虫が出現する注目種のツマキチョウは、2011年が最後の確認年になっている。

ガ類の大阪府レッドリスト種としては、準絶滅危惧のウスアオリンガが2016年12月に確認された。この種は貝塚市内では千石荘周辺だけで確認されている種で、2015年が初記録であった。また、同じく2015年には本調査地に隣接する千石荘ピクニックセンター跡地（貝塚市橋本）でも確認されている。その他、千石荘講座において、2016年4月8日に準絶滅危惧のキシタアツバが確認された。

2016年6月のチズモンアオシヤク、8月のモンキノメイガ、2017年7月のホソスジナミシヤク（図11）が、これまで当館に標本がなかった種である。



図11. ホソスジナミシヤク
（2017年7月3日）

9. ハチ目

注目種では、2006年が最後の確認年になっていたニッポンヒゲナガハナバチが2016年4月に確認された。それに対して、シロスジヒゲナガハナバチは兩年とも確認されず、2011年が最後の確認年になっている。2016年7月のナメクジハバチ属の一種の幼虫、2016年8月のオデコフタオビドロバチ、2017年4月のコシアキハバチがこれまで当館に標本がなかった種である。

10. 大阪府レッドリスト種と注目種

2005年からの9年の調査で確認された大阪府レッドリスト種、および自然遊学館の注目種を表7にまとめた。いずれの年も4月から12月まで調査を行ったが、2005年と2006年は月に3回の調査であるのに対して（12月は1回）、2011年以降は月に1回の調査なので、確認種に関しては正確な比較はできない。

表7. 千石荘において2005年、2006年、および2011年～2017年に行われた調査で確認された大阪府レッドリスト種および注目種
「○」印は、著者自身による調査、「△」印は、千石荘講座(2015年開始)での確認であることを示している。

ランク等	目	科	種	2005年	2006年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
絶滅危惧Ⅱ類	トンボ目	サナエトンボ科	オグマサナエ								△	
		トンボ科	ナニワトンボ		○				○			
準絶滅危惧	トンボ目	イトトンボ科	ベニイトトンボ	○	○			○	○	○	○	
			キイトトンボ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		ヤンマ科	サラサヤンマ							△		
		サナエトンボ科	ウチワヤンマ								○	○
		トンボ科	アキアカネ	○	○	○		○		△		
			ナツアカネ	○								
			ノシメトンボ	○	○	○	○					
			ヨツボシトンボ							○		△
	バッタ目	コオロギ科	ナツノツツレサセコオロギ						○	○	○	○
	コウチュウ目	テントウムシ科	ジュウサンボシテントウ									○
	チョウ目	セセリチョウ科	ホソバセセリ						○			
		コブガ科	ウスアオリンガ							○	○	
		ヤガ科	キシタアツバ								△	
注目種	トンボ目	サナエトンボ科	タイワンウチワヤンマ	○								△
	バッタ目	コオロギ科	クマズムシ					○				
		マツムシ科	マツムシ	○	○	○	○			○		△
			カンタン	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		バッタ科	ショウリヨウバッタモドキ	○						○	○	○
			クルマバッタ									
	カマキリ目	ヒメカマキリ科	サツマヒメカマキリ		○		○	○		○		
	ナナフシ目	ナナフシ科	ナナフシモドキ	○		○		○				○
	カメムシ目	セミ科	チッチゼミ	○	○		○	○	○	○		
		キンカメムシ科	オオキンカメムシ	○								
	アミメカゲロウ目	クサカゲロウ科	アミメクサカゲロウ	○	○		○	○	○			○
		ラクダムシ科	ラクダムシ			○						
	コウチュウ目	ハンミョウ科	コハンミョウ			○		○				
		クワガタムシ科	ヒラタクワガタ	○	○							
		コガネムシ科	カブトムシ	○	○		○	○	○	○	○	○
	ハエ目	ハナアブ科	ハチモドキハナアブ	○	○	○	○	○				
	チョウ目	シロチョウ科	ツマキチョウ	○	○	○						
		ジジミチョウ科	ミズイロオナガジジミ		○			○				
		ヤガ科	コシロシタバ				○	○				
	ハチ目	コシバハナバチ科	ニッポンヒゲナガハナバチ		○						○	
			シロスジヒゲナガハナバチ			○						
		ミツバチ科	ニホンミツバチ		○	○				○		

最後に、本文中で紹介したトンボ目、バッタ目、チョウ類以外の種に関して、2016年のリストを表8に、2017年のリストを表9に示した。

表8. 2016年4月から12月にかけて千石荘において確認された他の昆虫

「△」印は幼虫による確認、「○」印は成虫による確認、「鳴」印は、鳴き声による確認であることを示している。
カマキリ目に関しては、幼虫と成虫の個体数も示した。

目	科	種	学名	調査月 調査日	4月 12日	5月 5日	6月 2日	7月 2日	8月 2日	9月 6日	10月 4日	11月 3日	12月 1日
カマキリ目	カマキリ科	オオカマキリ	<i>Tenodera aridifolia</i>		卵	△4	△5	△4		♂3♀2	♂1♀1	♀1卵2	
		ハラビロカマキリ	<i>Hierodula patellifera</i>		卵	卵	△1			♂1♀1			
カメムシ目	セミ科	ニイニゼミ	<i>Platyleura kaempferi</i>					○鳴	○鳴	鳴			
		アブラゼミ	<i>Graptopsaltria nigrofuscata</i>						○				
		クマゼミ	<i>Cryptotympana fascialis</i>						○				
		ツクツクボウシ	<i>Meimuna opalifera</i>						鳴	○鳴			
		アブラムシ科	ケヤキヒトスジワタムシ	<i>Paracolopha morrisoni</i>									
カスミカメムシ科	クスベニヒラタカスミカメ	<i>Mansoniella cinnamomi</i>								○		○	
アミメカゲロウ目	ヒメカゲロウ科	ミドリヒメカゲロウ	<i>Notiobiella subolivacea</i>		○								
コウチュウ目	オサムシ科	ニッポンツヤヒラタゴミムシ	<i>Synuchus agonus</i>										○
	クワガタムシ科	クワガタ	<i>Macrodercus recta</i>					○					
	コガネムシ科	カブトムシ	<i>Allomyrina dichotoma</i>						○			△	△
ハエ目	ガガンボ科	ミスジガガンボ	<i>Gymnastes flavitibia</i>					○					
チョウ目	ツトガ科	モンキノメイガ	<i>Pelena sericea</i>						○				
	ジャクガ科	チズモンアオシヤク	<i>Agathia carissima</i>			○							
	コバガ科	ウスアオリンガ	<i>Paracrama angulata</i>			○							
ハチ目	ハバチ科	ナメクシハバチ属の一種	<i>Caliroa</i> sp.				△						
	ドロバチ科	オデコフタオビドロバチ	<i>Anterhynchium gibbifrons</i>						○				

表9. 2017年4月から12月にかけて千石荘において確認された他の昆虫

「△」印は幼虫による確認、「○」印は成虫による確認、「鳴」印は、鳴き声による確認であることを示している。
カマキリ目に関しては、幼虫と成虫の個体数も示した。

目	科	種	学名	調査月 調査日	4月 13日	5月 2日	6月 6日	7月 3日	8月 1日	9月 14日	10月 3日	11月 7日	12月 5日
カマキリ目	カマキリ科	オオカマキリ	<i>Tenodera aridifolia</i>				△1	△5	△1	♂1♀2	♂3♀5	♂1♀2 卵2	
		チョウセンカマキリ	<i>Tenodera angustipennis</i>		卵					△1			
		ハラビロカマキリ	<i>Hierodula patellifera</i>							♀1	♀2卵1	♀1卵1	
		コカマキリ	<i>Stalitia maculata</i>							♀2	♀2	♂1♀2	1♂1♀
ナナフシ目	ナナフシ科	ナナフシモドキ	<i>Baculum irregulariterdentatum</i>					○					
カメムシ目	セミ科	ニイニゼミ	<i>Platyleura kaempferi</i>					鳴	○	鳴			
		アブラゼミ	<i>Graptopsaltria nigrofuscata</i>						○	鳴			
		クマゼミ	<i>Cryptotympana fascialis</i>						○				
		ツクツクボウシ	<i>Meimuna opalifera</i>							○	鳴		
		カスミカメムシ科	クスベニヒラタカスミカメ	<i>Mansoniella cinnamomi</i>							○		
アミメカゲロウ目	クサカゲロウ科	アミメクサカゲロウ	<i>Apochrysa matsumurae</i>					○					
コウチュウ目	オサムシ科	アオヘリアトキリゴミムシ	<i>Parena latecincta</i>									○	
	クワガタムシ科	クワガタ	<i>Macrodercus recta</i>						○	○			
	コガネムシ科	カブトムシ	<i>Allomyrina dichotoma</i>		△	△	△		○				
	テントウムシ科	ジュウサンホシテントウ	<i>Hippodamia tredecimpunctata</i>					○					
	カミキリムシ科	ヤツメカミキリ	<i>Eutetrappa ocelota</i>				○						
ハエ目	ガガンボ科	ミスジガガンボ	<i>Gymnastes flavitibia</i>			○							
チョウ目	ジャクガ科	ホソスジナミジャク	<i>Microlygris complicata</i>					○					
ハチ目	ハバチ科	コシアキハバチ	<i>Tenthredo gifui</i>		○								
	コシブトハナバチ科	ニッポンヒゲナガハナバチ	<i>Tetralonia nipponensis</i>		○								

謝辞

標本の同定にご協力いただいた澤田義弘氏と森康貴氏、および千石荘の昆虫に関する情報を頂いた北田誠氏と山口隼平氏に謝意を表する。

引用文献・参考文献

石井 実・青柳正人・岩崎 拓・中谷至伸・上田達也 (1997) 貝塚市千石堀城址周辺の昆虫。「貝塚市自然環境調査報告書 (1996年度)」, pp. 31-46、貝塚市立自然遊学館。

岩崎 拓 (2006) 千石荘の昆虫 I. 貝塚の自然 第9号: 1-11.

- 岩崎 拓 (2008) 千石荘の昆虫Ⅱ (2006 年度調査). 貝塚の自然 第 10 号 : 24-35.
- 岩崎 拓 (2013) 千石荘の昆虫 (2011 年度調査). 貝塚の自然 第 15 号 : 5-14.
- 岩崎 拓 (2014) アカハネオンブバッタ. 自然遊学館だより No. 73 : 1-2.
- 岩崎 拓 (2016) 千石荘の昆虫 (2012-2013 年度調査). 貝塚の自然 第 17 号 : 74-87.
- 岩崎 拓 (2017) 千石荘昆虫調査 2016. 自然遊学館だより No. 83 : 18-20.
- 岩崎 拓 (2018a) 千石荘昆虫調査 2017. 自然遊学館だより No. 88 : 12-14.
- 岩崎 拓 (2018b) 千石荘の昆虫 (2014-2015 年度調査). 貝塚の自然 第 19 号 : 66-80.
- 上久保文貴・湯浅幸子・白木江都子・鈴木勝也・岩崎 拓 (2020) 千石荘樹木調査 (2012-2018 年). 貝塚の自然 第 20 号 : 1-22.
- 大阪府 (2014) 『大阪府レッドリスト 2014』. 48pp.、大阪府環境農林水産部みどり・都市環境室.
- 環境庁 (1997) 都道府県別メッシュマップ 27 大阪府. 36pp.、環境庁自然保護局計画課自然環境調査室.
- 澤田智子 (2016) はじめまして「オグマサナエ」です!. 自然遊学館だより No. 80 : 8-9.
- 白木江都子・岩崎 拓 (2017) クスベニヒラタカスミカメ. 自然遊学館だより No. 82 : 1-2.
- 安永智秀・穆 怡然・長島聖大・山田量崇・高井幹夫 (2016) 最近日本に侵入した外来カスミカメムシ : *Mansoniella cinnamomi*. *Rostria*, No. 60 : 17-20.

付図

毎月の調査後すぐに、自然遊学館の玄関横の掲示板、あるいは館内の里山コーナーに、調査結果を速報として貼り出した。それらを付図として掲載した。

「千石荘」昆虫調査速報（2016年4月）

2016年4月12日 天候：晴れ／くもり 調査者1名
 少し肌寒い日がありますが、花が咲いている植物の種類は多くなってきました。クサノオウ、ホトケノザ、イヌガラシ、レンゲ、アケビ、ミツバアケビ（写真）などです。クサイチゴはすでに熟した実もありました。



チョウ目 チョウ類6種
 チョウ類は、ナミアゲハ、モンシロチョウ、コムシジ、テングチョウ、ヤマトシジミ、ヘニシジミを確認しました。でもまだチラホラという感じです。ガ類では、ヒトリガ科のヨツボシホリハ幼虫、クワゴマダラヒトリ幼虫を確認しました。



ヘニシジミ

ハチ目
 ニッポンヒゲナガハナバチの写真を撮りたかったのですが、吸蜜の写像是撮ることができず、網にたまたま入ったオスを遊学館に帰ってから撮影しました。その他、ニホンカブラハナバチ、ハリプロシリアガアリ、ルリアリ、クワヤマアリを確認しました。



ニッポンヒゲナガハナバチ

アミメカゲロウ目
 ヒメカゲロウ科は淡褐色のものがほとんどですが、ミドリヒメカゲロウは和名の通り緑色です。貝塚市内では、蕎原で記録がありましたが、千石荘では初めて確認しました。越冬ステージは成虫です。



ミドリヒメカゲロウ

哺乳類
 昆虫が少なかったため、哺乳類の話題です。切通しのウッドチップの道で、遠くからアナグマがまっすぐに走って近づいてきました。20mほどの距離になって、こちらに気付いたようで、引き返して走り去りました。遊学館の記録では、千石荘で7種目の哺乳類の確認となりました。



アナグマ

「千石荘」昆虫調査速報（2016年5月）

2016年5月5日 天候：晴れ 調査者1名
 ウグイスやヤマガラの鳴き声がよく聞こえます。咲いている花は少なくなりました。白い花が目立つのはノイバラで、いろいろな虫を引き付けていました。今年も林縁でギンランが10株ほど咲きました（右の写真）。



チョウ目 チョウ類12種
 チョウ類は、ナガサキアゲハ、アオスジアゲハ、モンシロチョウ、モンキチョウ、ヒメウラナミジャノメ、サトキマダラヒカゲ、コムシジ、ツマグロヒョウモン、テングチョウ、ツバメシジミ、ヘニシジミ、ダイミョウセセリを確認しました。



ダイミョウセセリ

トンボ目
 牛神池ではギンヤンマしか確認できませんでした。ボタン池でアオモンイトトンボ、切通してハラヒロトンボとシオカラトンボを確認しました。これまでの調査では、牛神池でトンボ目の種数を稼いでいたのですが、今回はパターンが違いました。



アオモンイトトンボ

カメムシ目
 ボタン池の西隅に、アメンボの幼虫が強い西風を避けるように集まっていた。風下に流されたのではなく、風上の岸に身を置いていました。その他、ベニキジラミ、ニッケイトガリキジラミの虫こぶ、クロヒラタヨコバイ、シラホシカメムシ、オオホシカメムシなどを確認しました。



アメンボ幼虫

コウチュウ目
 ホホシロアシナガソウムシはウルシ科の植物にいます。千石荘にはヌルデ、ハゼノキ、ヤマウルシ、ヤマハゼが生えています（写真はヌルデ）。その他、コアオハナムグリ、クスノチビタマムシ、アカアシオオクシコメツク、クロオビカサハラハムシなどの普通種を確認しました。



ホホシロアシナガソウムシ

「千石荘」昆虫調査速報（2016年6月）

2016年6月2日 天候：晴れ 調査者1名
 草本で花が目立つのはドクダミ（花弁上にササグモ）、クサノオウ、ムラサキカタハミなどで、アメリカオニアザミも咲き初めて。木本では、ヤブニッケイの花が咲いていて、ウツギの花がほぼ終わりがけていた。



チョウ目 チョウ類7種
 チョウ類の成虫は、ナミアゲハ、モンシロチョウ、モンキチョウ、ヒメウラナミジャノメ、コムシジ、キタテハの6種を確認し、その他、ダイミョウセセリの幼虫がオニドコロの葉を巻いて、巣を作っていました。ガ類では、チスモンアオシヤクが自然遊学館に標本がない種でした。



ダイミョウセセリ幼虫

カマキリ目
 オオカマキリとハラヒロカマキリの2種を確認しました。オオカマキリの幼虫を5個体確認し、そのうちの2個体はカマキリヤドリバエに卵を産み付けられていました。右の写真の幼虫は、腹部背板の右側に卵を産み付けられています。6月と9月に卵付着率のピークがあります。



オオカマキリ幼虫

カメムシ目
 右の写真はサクラ類の葉が赤く変色したもので、サクラコブアブラムシがサクラ類の葉に作る虫こぶです。ヌルデ上では、ハゼアブラムシが発生していて、アミメアリがそのコロニーを守っていました。ハゼアブラムシを守るアリの種は、特異的ではないようです。



サクラハチヂミ

バッタ目
 キリギリスは幼虫だけ、ヤブキリは幼虫に混じって、成虫を1個体確認しました。キンヒバリとナツノツツレサセコオロギの鳴き声を聞きました。ナツノツツレサセコオロギは、大阪府レッドリストで準絶滅危惧に指定されています。今回も鳴き声の確認だけで、採集は出来ませんでした。



ヤブキリ

付図1（左上）. 千石荘昆虫調査速報（2016年4月）

付図2（右上）. 千石荘昆虫調査速報（2016年5月）

付図3（左下）. 千石荘昆虫調査速報（2016年6月）

「千石荘」昆虫調査速報（2016年7月）

2016年7月2日 天候：晴れ 調査者1名

林縁ではヤブガラシやヘクソカズラの花が咲き始めました。ニイニゼミも鳴き始めました。鳥では、ヒヨドリ、ウグイス、ヤマカガシの鳴き声に混じって、ホトトギスの鳴き声も聞こえます。水田にはチュウサギが数羽いました。



チョウ目 チョウ類9種

クロアゲハ、ナガサキアゲハ、モンシロチョウ、キタキチョウ、ヒメウラナミジャノメ、ヒカゲチョウ、コムシジ、ベニシジミ、コチャバナセセリの9種のチョウを確認しました。キノコヒモミノガの糞は少しありましたが、確実に生きています。幼虫が入っているものは確認できませんでした。



コチャバナセセリ

トンボ目

ウチウヤンマは少なくとも2♂を確認しました。大阪府レッドリストの2014年の改定で、ランク外から準絶滅危惧に入れられました。キイトンボも同様です。この2種の他に、チョウトンボ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、コシアキトンボ、ウスバキトンボを確認しました。



ウチウヤンマ

ハエ目

ミスジガガンボという山地性の小さなガガンボを採集しました。これまで貝塚市内では、木積から和泉葛城山の山頂までの標本がありましたが、千石荘では初めての記録となりました。その他、ハキナガツリアブ、アメリカミスアブ、ホシアシナガヤセバエなどを確認しました。



ハキナガツリアブ

ハチ目

存在は知っているけど実際に見たことがないものを見つけることは嬉しいものです。写真はナメクジのように「テカテカ」したナメクジハバチ属の幼虫です。エノキの葉裏にいて、葉の表面をこぼけていました。ナメクジハバチの仲間、自然遊学館の市内産標本にはない種です。



ナメクジハバチ属幼虫

「千石荘」昆虫調査速報（2016年8月）

2016年8月2日 天候：晴れ 調査者1名

緑一色となった水田の上を飛ぶツバメは、ウスバキトンボの群れには興味がないように見えます。右の写真はアズチグモです。背中に乗っているオスは成体、メスは亜成体で、オスはメスが成体になるのを待っているのだとか。



チョウ目 チョウ類11種

モンキアゲハ、ナガサキアゲハ、アオスジアゲハ、モンシロチョウ、キタキチョウ、サトキマダラヒカゲ、コムシジ、ゴマダラチョウ、ツマグロヒョウモン、ヤマトシジミ、ウラギンシジミを確認しました。写真のモンキノメイガは自然遊学館に標本がない種でした。



モンキノメイガ

トンボ目

ハグロトンボ、キイトンボ、ベニイトンボ、ギンヤンマ、クロスジギンヤンマ、ウチウヤンマ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、リスアカネ、チョウトンボ、コシアキトンボ、ウスバキトンボを確認しました。キイトンボは個体数が多く、ペアになっているものもいました。



キイトンボ

カメムシ目

クマゼミ、アブラゼミ、ニイニゼミ、ツクツクボウシの4種のゼミが鳴いていました。この中では、クマゼミとニイニゼミが優勢のようです。写真はエビイロカメムシの幼虫です。枯れたススキに止まると保護色のようになりますが、緑の生きたススキの葉上ではとても目立ちます。



エビイロカメムシ幼虫

バッタ目

キリギリスの鳴き声が聞こえます。何とかクマバッタの写真を撮ろうと思っているのですが、今回は願いは叶いませんでした。似たものとして、トノサマバッタとクマバッタモドキの幼虫を確認しました。ショウリョウバッタモドキも葉の裏側に逃げて、写真を撮らせてくれません。



トノサマバッタ幼虫

「千石荘」昆虫調査速報（2016年9月）

2016年9月6日 天候：くもり 調査者1名

水田のイネの実がかなり大きくなっていました。涼しさを感じる日がしばらく続いていましたが、今日は雨後ということもあり、蒸し蒸しします。さっそくキノコが出ました。右の写真はサンコタケという臭いキノコです。



チョウ目 チョウ類12種

ナミアゲハ、クロアゲハ、ナガサキアゲハ、アオスジアゲハ、モンシロチョウ、ヒメウラナミジャノメ、サトキマダラヒカゲ、ツマグロヒョウモン、ヤマトシジミ、ウラナミシジミ、イチモンジセセリ、チャバナセセリを確認しました。



クロアゲハ

トンボ目

オオアオイトトンボ、キイトンボ、ギンヤンマ、シオカラトンボ、リスアカネ、チョウトンボ、ウスバキトンボの7種を確認しました。先月の11種から種数が減りました。今年はナニフトンボを見ないまま、調査を終えることになりそうです。



リスアカネ

バッタ目

鳴く虫のシーズンになりました。樹上からはクサヒバリ、カネタタキ、アオマツムシ、草上や草の中からはオナガサザキリやキリギリス、地面近くからはエンマコオロギ、ハラオカメコオロギ、モリオカメコオロギ、ツツレサセコオロギ、マダラスズなどの鳴き声が聞こえました。



ショウリョウバッタモドキ

カメムシ目

ゼミの鳴き声はかなり減り、ツクツクボウシと、少しのニイニゼミの鳴き声だけが聞こえました。せめてツクツクボウシだけでも写真を撮ろうと思ったのですが、逃げられました。マルカメムシ、ホソハリカメムシ、ホシハラビロヘリカメムシといった常連ばかりを確認しました。



ツマグロオオコバエ

付図4（左上）. 千石荘昆虫調査速報（2016年7月）

付図5（右上）. 千石荘昆虫調査速報（2016年8月）

付図6（左下）. 千石荘昆虫調査速報（2016年9月）

「千石荘」昆虫調査速報（2016年10月）

2016年10月4日 天候：くもり 調査者1名

水田のイネは収穫を待つばかりという状態です。昆虫全体の数は、先月よりも明らかに減りましたが、その中で目にする機会が多かったのは、クロウリハムシとツマグロオオヨコバイでした。



チョウ目 チョウ類10種

チョウ類は、モンシロチョウ、キタキチョウ、ヒメウラナミジャノメ、ヒオドシチョウ、ツマグロヒョウモン、ウラギンシジミ、ヤマトシジミ、ウラナミシジミ、ベニシジミ、チャバネセセリを確認しました。写真は、野菜などの害虫として知られるハスモンヨトウで、幼虫もいました。



ハスモンヨトウ

カメムシ目

セミの鳴き声はまったく聞こえません。ヒメジュウジナガカメムシがコセンダングサに集まっていました。ポタン池のほとりに生えたクスノキの幼木に、昨年府内各所で見つかり出した外来種のカスミカメムシがいました。クスノキの葉にまだ模様を付けるのが目印になります。



ヒメジュウジナガカメムシ

バッタ目

鳴く虫の構成は先月からほとんど同じで、変わったことといえば、キリギリスの鳴き声が聞こえなくなったくらいです。クサキリはまだ幼虫でした。バッタ類は、ツチイナゴ、コバネイナゴ、オンブバッタ、トノサマバッタ、ショウリョウバッタモドキを確認しました。



ツチイナゴ

ハチ目

アリ類の活動もかなり減ってきました。キンケハラナガツチバチがヒヨドリバナに集まるのは、秋の馴染みの光景です。オオスズメバチがアカメガシワの樹幹に1匹たかっけていて、写真を撮っていると、撮影者の耳に羽音を聞かせるように、もう1匹やって来ました。



オオスズメバチ

「千石荘」昆虫調査速報（2016年11月）

2016年11月3日 天候：晴れ 調査者1名

稲刈りは終わっていました。風はやや冷たく、昆虫も少なく、花が咲いている植物も少しになりました。池の土手では、ツリガネニンジン（右の写真）やタヌキマメの紫色の花が少しだけ咲いていました。



チョウ目 チョウ類6種

チョウ類は、アオスジアゲハ、モンシロチョウ、キタキチョウ、キタテハ、ウラナミシジミ、ベニシジミを確認しました。いずれも2〜3匹です。個体数も種数も、先月より一気に減りました。カ類では、草の間に、シロオビノメイガを多数、確認しました。



キタテハ

カメムシ目

ヌルデの枝にヌルデミミフシという虫こぶが付いていました。ヌルデシロアブラムシがつくる虫こぶで、すでに脱出孔が開いているものもありました。その他、ツマグロオオヨコバイ、マルカメムシ、ヨコツナサシガメ幼虫、クサギカメムシ、シラホシカメムシを確認しました。



クサギカメムシ

バッタ目

鳴き声を聞いたのは、カネタタキ、クサヒバリ、カンタン、ハラオカメコオロギ、マダラスズ、オナガササキでした。ショウリョウバッタモドキの体色は、チガヤの「薄緑色+薄紅色」ととても似ていて、見るたびに感心させられます（右の写真）。



ショウリョウバッタモドキ

ハエ目・コウチュウ目

アメリカミスアブ、オオハナアブ、ホソヒラタアブ、キアシフンバエ（写真）、ヒゲナガヤチバエ、ツマグロキンバエのほか、ヨモギワタタマバエがヨモギに作る虫こぶ（ヨモギクワワフシ）を確認しました。木製イスの下に、数匹のカフトムシの幼虫を見つけました。



キアシフンバエ

「千石荘」昆虫調査速報（2016年12月）

2016年12月1日 天候：くもり 調査者1名

冬の曇空の下と言えば、寂しさが募るばかりというのが相場ですが、写真で伝わらないのが16℃という気温の高さです。クヌギやアベマキは落葉しましたが、コナラはまだ緑の葉が大半を占めています。



チョウ目 チョウ類1種

おそらくチョウはまったく見ないだろうと予想していましたが、ポタン池のほとりに生えたクロバイの葉に、ウラギンシジミのメス成虫が止まっていました。チョウが葉の裏側か、最初は分かりませんでした。結局、チョウ類は、この1種だけで、ガ類は確認できませんでした。



ウラギンシジミ

カメムシ目

確認できた30種ほどの昆虫のうち、カメムシ目が半数を占めました。成虫で越冬する種の割合が高く、この日が暖かくて、活動できたからでしょう。右の写真は、クスノキに寄生する外来種のカスミカメムシです。最近の論文で、和名が「クスベニヒラタカスミカメ」となりました。



クスベニヒラタカスミカメ

バッタ目

樹上からカネタタキ、草間からオナガササキの鳴き声を少しだけ聞きました。いずれも弱々しい鳴き声で、冬の訪れを予感させます。右の写真はツチイナゴです。こちらは成虫で越冬する前なので、いたって健康体という様子でした。



ツチイナゴ

コウチュウ目

先月に引き続き、カフトムシの幼虫が確認できました。ヤマザクラの「名札」をめくると、ユミアシゴミムシダマシとクロウリハムシがいました。澤田義弘さんに同定していただいたニッポンツヤヒラタゴミムシは、これまで自然遊学館に標本がない種でした。



ユミアシゴミムシダマシ

付図 7（左上）. 千石荘昆虫調査速報（2016年10月）

付図 8（右上）. 千石荘昆虫調査速報（2016年11月）

付図 9（左下）. 千石荘昆虫調査速報（2016年12月）

「千石荘」昆虫調査速報（2017年4月）

2017年4月13日 天候：晴れ 調査者1名

暖かくなりました。クサイチゴの白い花が目立ちます。ヘビイチゴ、クサノオウ、ホトケンザ、ハコベ、ムラサキケマン、セイヨウタンポポなども咲いていました。右の写真は田んぼの脇に少しだけあったレンゲの花です。



チョウ目 チョウ類7種

チョウ類は、モンシロチョウ、モンキチョウ、キタキチョウ、キタテハ、テングチョウ、ルリシジミ、ベニシジミの7種を確認しました。写真のキタテハは、翅を開いている時間の方が長く、不規則に1秒ほどパッと翅を広げます。なので、なかなか翅を広げている瞬間が撮れません。



キタテハ

バッタ目

草地ではヤブキリの幼虫が多くいて、キリギリスの幼虫はまだ少かったです。ツチイナゴは2個体しか見ませんでした。ヒシバッタ属の幼虫は、種までは分かりません。写真は、雑木林の林床に積もった落葉の中にいたハネナシコロギスの幼虫です。幼虫で越冬するようです。



ハネナシコロギスの幼虫

ハエ目

アシトハナアブ、オオハナアブ、シマハナアブ、ホソヒラタアブなどのハナアブ類が飛翔や吸蜜をしている姿が目立ちました。写真はクロヒラタアブ属の一種がアオキの花で吸蜜しているところです。その他、オオユスリカ、キリウシガガンボ、ヒゲナガヤチバエなどを確認しました。



クロヒラタアブ属の一種

ハチ目

アリ類は、トビロケアリとキイロシリアゲアリの2種だけでした。ヒメハラナガツチバチ、ナガゼンマイハバチ、コシアキハバチ、キマダラハナバチ属の一種は、写真を撮ることが出来なかったため、クサイチゴの花に吸蜜に来たセイヨウミツバチの写真を載せました。



セイヨウミツバチ

「千石荘」昆虫調査速報（2017年5月）

2017年5月2日 天候：晴れ 調査者1名

牛神池の周囲にある数本のクロバイが白い花を咲かせていました（右の写真）。クサイチゴやヘビイチゴの花が減り、オニタビラコの花が目立つようになりました。林内でカクレミノの幼木に5裂の葉を見つけました。



チョウ目 チョウ類13種 + 幼虫1種

チョウ類の成虫は、ナミアゲハ、クローアゲハ、モンシロチョウ、モンキチョウ、ヒメウラナミジャノメ、サトキマダラヒカゲ、キタテハ、コムスジ、テングチョウ、ベニシジミ、ヤマトシジミ、ツバメシジミ、コチャバネセセリの13種と、アカタテハの幼虫を確認しました。



コチャバネセセリ

コウチュウ目

ヒメカネコメツキ属は希少種が多いのですが、前翅が青色の金属光沢のあるものは図鑑には載っていません。イチモンジハムシは貝塚市内では千石荘でしか確認されていません。その他、カフトムシの幼虫、ヘニヘリテントウ、クロボシツツハムシなどを確認しました。



ヒメカネコメツキ属の一種

ハエ目

ホソルリミズアブ属はよく見かけますが、種まで同定することが困難です。横から見た姿はハチ目のような印象を受けます。ハナアブ類は、アシトハナアブ、ホソヒラタアブ、オオハナアブ、シマハナアブなど、常連のものしか確認できませんでした。



ホソルリミズアブ属の一種

カメムシ目

ムネアカアワフキのメスの赤色は目立ちます（右の写真）。何か訴えたいものがあるのかもかもしれません。オスは前胸背が黒色で、赤色の部分は少いです。その他、ベニキジラミ、*Oliarus* 属のヒシウンカ、イチモンジカメムシ、ナガメ、クサギカメムシなどを確認しました。



ムネアカアワフキ

「千石荘」昆虫調査速報（2017年6月）

2017年6月6日 天候：晴れ 調査者1名

水田に水が入りました。田植えを待つばかりです。ツバメが水田の上を飛び交う姿が見え、林からはウグイスやホトトギスの鳴き声も聞こえてきます。今年もハルゼミの鳴き声を聞かず、もう8年ほど聞いていないこととなります。



チョウ目 チョウ類10種

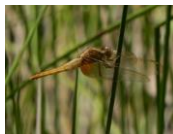
チョウ類は、ナガサキアゲハ、モンシロチョウ、キタキチョウ、モンキチョウ、サトキマダラヒカゲ、ヒメアカタテハ、ウラギンシジミ、ベニシジミ、ヤマトシジミ、ツバメシジミの10種を確認しました。写真のヨツスジヒメシンクイは市内で千石荘でしか確認されていない種です。



ヨツスジヒメシンクイ

トンボ目

ホソミオツネントンボ、ギンヤンマ、シオカラトンボ、ショウジョウトンボ、チョウトンボ、コシアキトンボの6種を確認しましたが、ショウジョウトンボの写真しか撮れませんでした。シオカラトンボ以外は、牛神池だけでの確認です。



ショウジョウトンボ

コウチュウ目

サクラの葉の上にピカッと光る虫がいて、「逃してはいけない」と網が反応しました。ヤツメカミキリは、蕎原や木積の山の方では記録がありましたが、千石荘の標本はありませんでした。その他、常連組の中では、ヤマイモハムシの交尾の写真を撮ることができました。



ヤツメカミキリ

ハエ目

ガガンボの仲間、地味で特徴のない種が多いのですが、このミスジガガンボは可憐な印象を受けます。その他、キイロホソガガンボ、ハラキンミズアブ、マダラアシナガバエ、ナガヒラタアブ、ヨコジマオオハリバエなどを確認しました。



ミスジガガンボ

付図 10（左上）. 千石荘昆虫調査速報（2017年4月）

付図 11（右上）. 千石荘昆虫調査速報（2017年5月）

付図 12（左下）. 千石荘昆虫調査速報（2017年6月）

「千石荘」昆虫調査速報（2017年7月）

2017年7月3日 天候：くもり 調査者1名

田植えが済んでいました。カエルはヌマガエルばかりで、水の中にはスクミリンゴガイが目立ちます。林からニイニゼミの鳴き声が聞こえます。いくぶん梅雨空ですが、夏間近という感じもします。



チョウ目 チョウ類8種

チョウ類は、アオスジアゲハ、モンシロチョウ、モンキチョウ、ヒメウラナミジャノメ、クロコノマチョウ、ヘニシジミ、ヤマトシジミ、コチャバナセセリの8種を確認しました。写真のホソスジナミシヤクは、これまで自然遊学館に標本がなかった種です。



ホソスジナミシヤク

トンボ目

キイトンボ、ギンヤンマ、コシボソヤンマ、ウチワヤンマ、シオカラトンボ、チョウトンボ、コシアキトンボ、ウスバキトンボの8種を確認しました。このうちコシボソヤンマは、幼虫が流れに棲むので、用水路から羽化したものか、川で羽化したものが飛来したのかもしれない。



コシボソヤンマ

クワチュウ目

クヌギの樹液まわりに来ていたナガゴマフカミキリの写真を載せようと思っていると、大阪府レッドリストで準絶滅危惧に指定されているジュウサンホシテントウが網に入りました。これまで街中昆虫調査で確認されていて、市内2例目の確認です。主に水辺のヨシ群落にいるそうです。



ジュウサンホシテントウ

バッタ目

キリギリス、ホンササキリ、キンヒバリのほか、ナツノツツシサセコオロギ（この種も準絶滅危惧）の鳴き声が聞こえます。年ごとに鳴き声の数が増えています。南西諸島が元々の分布域だったアカハネオンブバッタは、2013年に大阪湾沿いで確認され、千石荘では2016年が初でした。



アカハネオンブバッタ

「千石荘」昆虫調査速報（2017年8月）

2017年8月1日 天候：晴れ 調査者1名

夏本番となりました。クマゼミ、ニイニゼミ、アブラゼミが鳴いています。右の写真はナナフシモドキ（ナナフシ科）です。2013年以降の確認となりました。目的の一つ、ナニワトンボは確認できませんでした。



チョウ目 チョウ類14種

ナミアゲハ、ナガサキアゲハ、クロアゲハ、アオスジアゲハ、キタキチョウ、モンシロチョウ、ヒメウラナミジャノメ、ヒカゲチョウ、サトキマダラヒカゲ、コムシジ、ツマクロヒョウモン、ウラギンシジミ、ムラサキシジミ、ヤマトシジミの14種のチョウ類を確認しました。



コムシジ

トンボ目

ハグロトンボ、キイトンボ、クロイトンボ、アオモンイトンボ、クロスジギンヤンマ、ギンヤンマ、オオヤマトンボ、ウチワヤンマ、ショウジョウトンボ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、リリアカネ、チョウトンボ、コシアキトンボ、ウスバキトンボの15種を確認しました。



ハグロトンボ

クワチュウ目

カブトムシは増えていると思います。周回路で多数確認していた幼虫が羽化したのでしょう。1本のクヌギで1♂1♀（右の写真）、別のコナラで1♂を確認しました。その他、地面には前翅が多数落ちていました。クヌギの幹にはキマワリ、根元にはコクワガタもいました。



カブトムシ

バッタ目

写真はササキリの幼虫です。ウスイロササキリも、ショウリョウバッタモドキも幼虫でした。ハネナガヒシバッタは、2013年以降の確認です。その他、キリギリス、エンマコオロギ、コバナネナゴ、ショウリョウバッタ、クルマバッタモドキの成虫を確認しました。



ササキリ幼虫

「千石荘」昆虫調査速報（2017年9月）

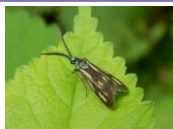
2017年9月14日 天候：晴れ 調査者1名

先月より幾分涼しくなりました。水田のイネの穂が実ってきました。セミではツクツクボウシ、コオロギではエンマコオロギの鳴き声がよく聞こえます。タヌキマメが1株だけ花を咲かせていました。



チョウ目 チョウ類12種

キアゲハ、ヒメジャノメ、ヒカゲチョウ、サトキマダラヒカゲ、コムシジ、ウラナミシジミ、キマダラセセリ、など12種のチョウ類を確認しました。右の写真は、昼行性のキスジホソマダラというガです。ガ類では他に、カノコガと、種名の分からないカレハガ科の幼虫を確認しました。



キスジホソマダラ

カマキリ目

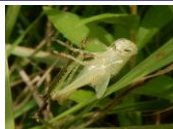
調査の最初にコカマキリの緑色型♀を確認しました。コカマキリはほとんどが褐色型で、緑色型はごく少数です。別の1♀は褐色型でした。その他、オオカマキリ1♂2♀、チョウセンカマキリ1幼虫、ハラヒロカマキリ1♀を確認しました。



コカマキリ（緑色型）

バッタ目

樹上からクサヒバリの鳴き声がよく聞こえます。カナタタキの鳴き声はまだ少なめです。写真はツチイナゴの羽化殻で、この上の草に羽化したのオス成虫がとまっています。オンブバッタの仲間は、侵入種のアカハネオンブバッタだけを確認しました。



ツチイナゴの羽化殻

カメムシ目

ツクツクボウシ以外では、ニイニゼミが少しと、アブラゼミが1個体だけ鳴いていました。クスノキの1本の若木に、クスベヒラタカスミカメが多数付いていました。写真はヌルデシロアブラムシがヌルデに作る虫こぶで、毎年、同じ木に出来ます。



ヌルデミムシ

付図 13（左上）. 千石荘昆虫調査速報（2017年7月）

付図 14（右上）. 千石荘昆虫調査速報（2018年8月）

付図 15（左下）. 千石荘昆虫調査速報（2019年9月）

「千石荘」昆虫調査速報（2017年10月）

2017年10月3日 天候：くもり 調査者1名
水田のイネの穂が実って、収穫間近という感じです。右の写真のツリガネコンジンのほか、ノアズキ、キツネノマゴ、ヒヨドリバナ、ツククサ、アキノノゲシ、アキノタムラソウ、イヌタデ、などが花を咲かせていました。



チョウ目 チョウ類5種
チョウ類は、ヒメウラナミジャノメ、ヒカゲチョウ、ツバメシジミ、ウラナミシジミ、ウラギンシジミを確認しました。雨上がりで風も強かったせいか、種数は少なめでした。カ類は、シロオビノメイガ、ハスモンヨトウ幼虫、ホタルガの3種を確認しました。



ツバメシジミ

バッタ目
樹上からは、クサヒバリ、カネタタキ、アオマツムシの鳴き声が聞こえます。草上ではカンタンやオナガササキリが鳴いています。写真のウスグモスはオスも鳴かないという「変わり者」です。オンブバッタはいず、アカハネオンブバッタが5♀2♀という結果は意外でした。



ウスグモス

カマキリ目
ハラビロカマキリの卵囊に、カマキリタマゴカツオブシムシのメス成虫が来ていました。産み付けた卵から孵った幼虫がカマキリの卵を食べて発育し、来春に成虫が現れます。カマキリの成虫では、ハラビロカマキリ2♀、コカマキリ2♀、オオカマキリ3♂5♀を確認しました。



ハラビロカマキリ卵囊

カメムシ目
セミは、ツクツクボウシがちらほらと鳴いているだけになりました。ツマグロオオヨコバイ、アオバハゴロモ、ヨコツナサシガメ幼虫、アカスジカスミカメなど常連ばかりの確認となりました。マルカメムシも常連ですが、幼虫の姿はそれほど馴染みがないかもしれません。



マルカメムシ幼虫

「千石荘」昆虫調査速報（2017年11月）

2017年11月7日 天候：晴れ 調査者1名
稲刈り後の水田が寂し気です。畔では、ススキの穂が風に揺れ、セイタカアワダチソウやコセンダングサの黄色い花が目立つほか、スカシタコボウ、ホトケノザ、カタバミ、トキワハゼなどが少し花を咲かせていました。



チョウ目 チョウ類6種
チョウ類は、モンキチョウ、モンシロチョウ、クロコノマチョウ、キタテハ、テングチョウ、ヘビシジミを確認しました。クロコノマチョウは幼虫でも確認しました。顔の左右の縁取りが目立ちます。カ類は、チャミノガの幼虫とヨモギエダシヤクの幼虫を確認しました。



クロコノマチョウ幼虫

バッタ目
先月より鳴き声はかなり減りました。樹上からはクサヒバリとカネタタキ、草上からはオナガササキリとカンタン、地面からはエンマコオロギなどの鳴き声がちらほら聞こえるだけです。ショウリョウバッタモドキは子ガヤの草間に、ツチイナゴはクスの葉上にそれぞれいました。



ショウリョウバッタモドキ

カマキリ目
オオカマキリは1♂2♀を確認し、そのうち1♀は産卵中で、他に1卵囊を確認しました。コカマキリも1♂2♀を確認し、そのうち1♂1♀は交尾中で、♂の首は繋がっていました。ハラビロカマキリ1♀は褐色型で、他に1卵囊を確認しました。



コカマキリ

その他
自然遊学館に持ち帰り同定したアオヘリアトキリゴミムシは、これまで標本がなかった種でした。右の写真はケヤキ広場に生えていたサンコタケ（きのこ）です。他にも、スッポンタケの「白玉」（幼菌）が20個ほどあり、伸びてしおれた柄も確認しました。



サンコタケ

「千石荘」昆虫調査速報（2017年12月）

2017年12月5日 天候：くもり 調査者1名
常緑の樹木が残り、紅葉は少なく、里山的な景観としては物足りない感じです。寒い上に風が強く、当然ながら、昆虫の確認はわずかでした。水田にイノシシの足跡あり。以下、昆虫の他、動物、植物、キノコのことを書きます。



昆虫
コカマキリ（1♂1♀）、チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、アオモンツノカメムシ（写真の右）、ヨモギワタマバエ虫こぶ、ヨツボシハムシ（左）を確認しました。カメムシの3種はいずれも、木の名札をめぐって見つけたものです。チョウ類の確認はありませんでした。



ハムシとカメムシ

その他の動物
クモ類は、シグモの巣とジョロウグモを確認しました。このシグモの巣は、大きな樹木や壁ではなく、細い1本のネザサに沿って作られていました。水田の畔には、タヌキのため糞がありました。



シグモの巣

植物
クチナシ、カラスウリ、センリョウなどの実を見ました。センリョウは赤い実のほかに、黄色い実が成った木がありました。花を見たのは、セイタカアワダチソウ、セイヨウタンポポ、ホトケノザ、イヌタデです。



黄実のセンリョウ

キノコ（菌類）
倒木にチャウロコタケ、立ち枯れ木にエノキタケを見ました。エノキタケの英名は winter mushroom と言い、冬のキノコの代名詞です。立ち枯れ木に見たサルノコシカケの仲間は、ダイダイタケのようですが、検討が必要です。



エノキタケ

付図 16（左上）. 千石荘昆虫調査速報（2017年10月）

付図 17（右上）. 千石荘昆虫調査速報（2017年11月）

付図 18（左下）. 千石荘昆虫調査速報（2017年12月）